



# 子連れフィールド・ワーカー奮闘記 アメリカ篇 すべての子どもたちの健康を祈って

玉山 ともよ (たまやま ともよ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

## 先住民社会の変化を調査

アメリカ合衆国ニューメキシコ州、ここには広島・長崎へ落とされた原爆の原料となったウランという天然資源が豊富で、とりわけアメリカ先住民の居住している地域で採掘が、一九四〇年代後半から一九八〇年代初頭にかけておこなわれてきた。わたしのフィールドワーク地は、ウラン鉱山によって大きく社会が変化してきたラグナ、アコマ、ナヴァホの三先住民保留地。癌などのウランによる被曝ではないかと疑われる病気が多い。しかし現在に至るまで健康調査はおこなわれておらず、掘り返された場所もすべて修復されてはいない。

そして今再び、「地球温暖化に抗するのには原子力発電しかない」と、ウラン価格が高騰したために、再開発がブームとなるうとしている。わたしはウラン鉱山開発による先住民社会の変化状況を把握すべく、そこから車で一時間半ほど離れたアルバカーキの街に住みながら調査をしている、しかも子ども三人と「娘」(風葉)七才、息子「野原」三才、そして五月に生まれたばかりの娘「椿」。全員を引き連れてやって来た。

現在は日米教育委員会のフルブライト奨学金を得て一年間の予定で滞在している。学生向けの助成金等には、ほとんどと言っていないほど子どもがいる(家族を伴

う)という状況が想定されていない。今回は唯一家族手当があり、応募した時点で既に子どもが二人いたので、受かったときにはとても有難かった。だがしかし、もう一人できてしまった!無事自宅出産した後、八月の渡米までわずか三カ月しかなかった。

## たくましい子どもたち

幸いこちらに着いてすぐ家は見つかり、小学校と保育園もすぐ見つかった。子どもたちは英語がまったく話せないのに、

トイレの場所だけ教えて放り込んだ。平日は学校と園でいきなり一日の大半を過ごすことになった。日本人は周りに誰もいない。メキシコ系が多く、スペイン語は飛び交っているが、日本語は家でだけ。それでも子どもたちはたくましい。元気でいてくれるからこそ、昼間の赤ん坊しかいないときにわたしはやっと勉強する。

保留地を訪れるときは、子ども連れでなるべく行かないようにしている。保留地内はウラン鉱山とウラン精錬施設によって低レベル被曝地帯と考えられる場所が多いが、広大な面積のすべてがそうであるわけではない。鉱山跡から2キロも離れていないラグナ・ブレブロのある村でも、人びとはまったく普通に生活しており、危険であると考えられる場所はフェンスで囲まれ侵入禁止になっている。

わたし自身は特別な防御は何もしないし、そもそもすることもできないが、やはり自分の子どもたちを彼らが知らないうちに被曝の危険に晒すことには抵抗がある。

ネイティブ流に言えば、子どもは母なる大地からの贈りもの。三児の母として、すべての子どもたちが放射能汚染にさらされないよう、その原料たるウラン開発の行方を見守りながらフィールドワーカーしている。まさに子どもと一緒に!



クリスマスツリーの前で子どもたちと